

[月刊]

# キャッチ ピース

# 53

通巻132号/1997.5.20 定価100円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大規模軍縮を！  
米軍基地を撤去しよう！  
反核運動を継続し、核廃絶を！  
憲法9条を世界に！  
市民による平和政策を提起しよう！  
草の根の国際共同作業を進めよう！



**5.14-15**  
各地で抗議行動  
（写真は横浜防衛施設局前）  
沖縄の土地取り上げに

- 沖縄から（伊波洋一）
- 平和を訴える元海兵隊員
- 住民は「容認」してない  
— 実弾砲撃演習移転
- 「戦時立法」反対の声を！  
— ガイドラインと有事研究

**米海兵隊は  
日本にいらなない！  
NYタイムス意見広告  
5月末～6月初掲載決定！**

- 維持会員（月額） ● 参加会員（月額） ● 通信会員（年額）
- 個人 1口1000円 個人 1口 500円 3000円
- 団体 1口2000円 団体 1口1000円
- （会費は本紙購読料を含みます）

脱軍備ネットワーク  
**キャッチピース**

# 特措法改悪

## 日本の政治の貧しさ象徴

傍聴人逮捕は何だったのか

山中悦子 ● 編集部

一九九七年五月二五日、沖縄は本土復帰二五周年を迎えた。この日、米政府は異例の声明を発表した。まず日本政府ならびに沖縄県民に対する祝意、そして米軍基地の存在によって沖縄県民が被っている大きな負担を認識していること、しかし沖縄は「東アジア戦略の要」で、アジア太平洋地域の平和と安定、繁栄の基礎となつている日米関係の上できわめて重要な役割を果たす、というもの。一方日本政府は公式行事も行なわなければ公式見解さえ出さなかつた。橋本首相が記者会見で記者団の質問に答えて「米軍基地の縮小と経済振興に取り組み」と述べただけにとどまつた。

しかしこの日、沖縄県民には日本政府から特別なプレゼントがあつた。日本政府は沖縄県民にだけ特別にこれを贈つた。：「特措法（駐留軍用地特別措置法）。なんということだろう。こともあろうに「本土並み」が約束されたはずの本土復帰記念日に沖縄県民が日本政府から手にしたものが「特措法」だったとは。三千人の地主の土地はいとも簡単に再び政府が好きなように使えるものになつたのだ。

「沖縄のいたみに思いを馳せ：」「沖縄の苦しみを軽減するために：」とりあえずそんな言葉だけは水田町にも巷にも満ちあふれたこの一年半だったけれど、結局のところ沖縄の状況は少しも良くなるなら

なかつた。というより普天間基地の県内移設問題など基地の整理縮小はむしろ遠のいている。あの名護市辺野古の青い海に海上ヘリポートが建設されるかもしれない問題は今村人たちを大きく二分し対立させている。実質的な基地機能強化、リニューアルの実施は住民をさらに犠牲にして進められていく。どこを見れば整理縮小といえるのか。

「特措法」の非合法性についてはだれもが認識するところである。「試合の途中でルールを変える論」は人々の理解を容易にするものだった。地方自治、国民主権の剥奪。超ムカツタキタネエやり方は、けれども政府にとっては勝ち負けは勝ちだった。

沖縄の「土地問題」は政府にとって何だったのか。日米安保を日本国憲法より優先させたい政府にとってこの問題の解決とは、米軍基地内の土地の継続使用を可能にすることでしかなかった。その目的の前には沖縄の人々の生命も暮らしも関係なかつた。沖縄の人々にとって「土地問題」は「沖縄問題」と同義語である。大きなズレだ。政府はとりあえず「沖縄の基地の縮小」を指すと言つてい

る。けれどその実現のために、最も効果的で現実的な道である兵力削減について日本政府は米政府に協議したいとの申し出もしていない。協議の姿勢は単なるポーズ。ポーズを少しだけ見せたのは「土地問題」をクリアするための国会対策の一環だったという新聞報道があつた。政府ばかりか国会というところはそのようなところらしい。「土地問題」は「特措法」のあつけないほどの猛スピード成立をもって政府の思い通りに解決した。政府周辺には早くも沖縄問題は政治的最重要課題ではなくなつたとの空気が出てきたという。残念だが、さもありません。

「特措法」をめぐるこの間の政府、国会、本土、沖縄の動き、その始まりから決着までの足取りはあらためてさまざまに日本の現実を浮き彫りにした。なかでも国会、つまり政府、各政党、議員の実態のあまりのひどさは特筆ものだった。沖縄の人々が命をかけて反対していたその法の成立の行方が、党利党略、政局がらみの駆け引きの材料にしか過ぎなかつたとはあんまりだ。行財政改革、医療保険改革、日米防衛協力のためのガイ

ドラインの見直し等々の際、わが党の主張を少しでも入れてもらえるために：だという。行政改革で地方自治の拡充を主張したいがために「特措法」には賛成しておく」と結論を出した党があつたのには驚いた。沖縄からの意義申し立てを足蹴にしておいて足蹴にした理由は地方を大事にしたいがためだという。最終的には何をめざしての政策決定だったのか。

結局政治が国民一人一人の幸福のために行なわれていないことだけははつきりした。そんな為政者を選んだのはわたしたちに違いないのだが：。参議院を通過した日、国会内では信じられない出来事が起こつた。大勢の傍聴人が逮捕されたのだ。その夜東京芝公園で開催された一坪反戦地主会関東ブロック主催の抗議集会は「怒りがおさまりません！」という叫びから始まつた。

ここに四月二一日付けの朝日新聞投稿欄の切り抜きがある。「七十才になる父が逮捕された。（中略）テレビの画面。衛視が父の両脇を抱え乱暴に階段を引きずる。ズボンが無理に引き下げられ、腰痛治療のコルセットが見える。改正駐留軍用地特別措置法採決の参院本会議場で傍



聴人席から抗議、議事妨害で退場させられたという。しかし、なぜそれで二十一人の逮捕なのだ。（中略）貧しいハワイ移民の子の父は、五才で両親と離され弟と沖縄に来た。志願で飛行兵となるが訓練で殴られ眼底出血、生きて終戦を迎えた。戦後は社会党员として故郷への日米政府の横暴を憤りをもって見てきた。そんな老人が、やむにやまらず、ほんの少し怒りの声をあげただけなのに、なぜ逮捕なのだ。（後略）「当事者の声は聞こうと思えば聞こえる：。国会の中で耳を傾けた人はどれほどだったのか。

時代を変えよう。当事者と当事者の声が聞こえた人みんなまで。



# 沖縄から

沖縄がかわれば、アジア・太平洋がかわる

報告 26

「沖縄から」  
「沖縄ボイス」  
編集委員

伊波洋一

(沖縄県議会議員・前沖縄中部地区労働局長)

〒901-22  
沖縄県宜野湾市志真志517-1  
沖縄県平和センター気村  
TEL 098(898)6628  
FAX 098(897)6653  
郵便振替 鹿児島2-11249



沖縄返還から二十五年になる五月十五日を迎える沖縄では、今年も多くは多くの集會が開催された。五月十四日で強制使用期限が切れる多くの米軍用地の土地が改悪された特措法によって「無期限」に強制使用されていくことになったことに抗議する「軍用地の明け渡し・基地撤去を求める県民集會」が、十四日夜、権利と財産を守る軍用地主会(反戦地主会)と一坪反戦地主会、基地・軍隊を許さない行動する女性たちの会、市民・大学の会が主催して沖縄市民会館で行われ、県外からの参加者も多く、一千八百名を超える参加者が会場から溢れるほどだった。

主催者を代表して反戦地主会の照屋秀伝会長は「特措法は、一六〇九年の琉球侵略以来、四百年近く続いている差別と抑圧の延長線上にある」と指摘、「われわれは決してやられっぱなしではない。沖縄から、日本から、基地をなくし、この国を変えよう」と呼びかけた。

## 五・一五平和行進と県民大会

最大の取り組みとして沖縄平和運動センター主催の五・一五平和行進が全国から多くの労働組合員が参加して五月十三日から十五日まで行われた。沖縄本島の南部から

中部、北部から東海岸沿いに中部、西海岸沿いに中部へと三コースに分かれて行われた平和行進の参加者は、最終日だけで総数が四千人を超えるものとなった。

そして、平和行進の最終日にはゴール地点となった宜野湾市の中学校運動場で今年の五・一五県民大会が開催された。返還が合意された普天間飛行場の近くにある会場は、約一万人余の参加者で溢れ、時折、普天間飛行場に離発着するヘリコプターの騒音が響く中、改悪された特措法や県内移設への抗議の挨拶が続く。その後、在沖米軍指令部までデモが行われた。

五・一五平和行進は、全国の旧総評系の労働組合が参加する定番の平和学習イベントでもある。今回は全国各地から一千五百名を超える労働組合員が参加した。南部コースが五十二年前の沖縄戦の戦跡や平和の礎(いしじ)のある平和祈念公園などの平和モニュメントや戦争中に住民が非難したガマ(鍾乳洞)を訪ねるコースで、北部からの東海岸コースと西海岸コースは、中北部の自衛隊基地と米軍基地の前を通りながら抗議行動を行うコースである。

今回は、特措法の改悪と海上ヘリポート建設問題があり、東コースはキャンプシユワブのゲート前、西コースは嘉手納基地のゲート前で、特に大きな抗議行動が繰り広げられた。特にベトナム戦争以降に米軍の慰安場所とされたため多くの「国際児」が生まれた。しかし、米政府は米兵との国際児と母親を米国に受け入れる制度をアジアの他の国に対してつくっているのに、フィリピンを除外している。

米国からの報告では、湾岸戦争においてはアラブ諸国が米軍に慰安施設の建設を認めなかったために、湾岸戦争に従事した米兵の多くがフィリピンで休養を与えられ、そのために多くのフィリピン女性が集められたという。米軍がフィリピンをこれまで同様に慰安場所として見ていることを示している。

世界各地に駐留する米軍が現地の女性や子どもたちの人権を侵害していることを、各国の女性たちが一緒に考える今回の集會の意義は大きく、今後の具体的な行動計画を合意し、来年はワシントンD.C.でネットワーク集會を持つことを決めた。

## 沖縄独立のシンポジウム

これまでは無かったものとして、沖縄の独立や自立を考えるシンポジウムが目立った。ミュージシャンの喜納昌吉さん達は、県内外からパネリストを招いて、五月十五、十六日の両日にわたって沖縄独立

げられた。  
今年の参加者の多さは、沖縄の基地問題が全国に浸透していることを示すものだろう。

## 国際女性ネットワーク集會

平和行進に先立って五月一日から四日まで米国、韓国、フィリピン、日本と沖縄の女性たちが、基地と軍隊が引き起こす問題について話し合う「国際女性ネットワーク集會」が開催された。海外から二十名が参加した。主催は、サンフランシスコ州立大学教授のマーゴ・オカザワ・レイや都市住居プロジェクトのマーサ・マツオカさん達が組織するサンフランシスコ湾岸地域オキナワネットワークや二年前の米兵による少女暴行事件の後で沖縄の女性達が結成した基地・軍隊を許さない行動する女性たちの会などである。

集會は、初日と最終日が一般参加できる全体集會で、二日目と三日目はテーマ別のグループディスカッションを行った。

初日の全体集會や分科会では、アジア各地の米軍基地周辺や米軍が来る所で女性や子ども達の人権が侵害される多くの事件が起きていることが各地の報告者から明らかになった。

特に、韓国からは基地町といわれる地域

で米兵相手に多くの女性達が売買春を行っており、些細なことから米兵によって殺される事件が絶えないこと、米兵の起こす事件の数が沖縄よりはるかに多く、事件を起こした米兵への裁判権が多くの場合及ばないなど、返還前の沖縄のような状況が報告された。米軍基地が無くなったフィリピンからはアメリシアンと呼ばれる米兵とフィリピンの女性との間で生まれた子ども達

の責任も持っていない。日本の地位協定は四十七ページしかないが、ドイツでは米軍の地位協定が三百ページもあり、「国際児」についても一項目を割いて規定していることが、沖縄で国際弁護士として活動している米国女性弁護士から報告された。ドイツの地位協定は「国際児」の父親である米兵の養育義務を定めているという。米兵が母子を残して帰国しても、ドイツの法廷が父親の養育義務を認めると法的拘束力を持ち、米軍は父親を探して払わせねばならない。

米軍の駐留が約一世紀も続いたフィリピン

の激論会を行った。四百名以上が参加し、独立の可能性を現実的に語るパネラーや賛成、反対、自立にとどめるべきなどの意見が活発に練り広げられた。参加者の約六割が独立を肯定した。一九六〇年代にコザ市長だった大山朝常氏が基地問題が解決されないことに憤り、沖縄独立論を出版し、若者を含む多くの県民が独立や自立への関心を高めた。

地元新聞は、独立と自立の可能性に多くの紙面を割くようになった。週刊誌「ニューズウィーク」や米軍機関紙「星条旗」も沖縄の独立を求める声を紹介している。

沖縄市（元コザ市）のコミュニティFMで行われた独立についての討論会では、最初に「日本が独立するべきだ」という発言があり、会場から「そうだ、そうだ」と声があがり、もう議論が出たとして討論会は終わったことが、地元紙で報道された。

沖縄の独立論は、日本が主権国家として米軍の横暴から国民の基本的な権利を守りきれないことへの批判から生まれている。米軍基地問題を考える時、「日本が独立すべきだ」という指摘は、全国で共有できるものだ。

沖縄では、米軍基地からの脱却と県が進める国際都市形成構想が多くの沖縄県民に自信をつけさせ、自立や独立を語るように

なつたと言えよう。「独立」で思い出すのは、一昨年九月に代理署名を拒否した大田知事が一年後に縦覧を代行した時、何名かから大田知事は独立を決意しなければ続けられなかったと言われたことだ。私はそのことを重視していなかったが、沖縄県民の中に独立まで考えた人が多いのだと思うようになった。

## 訪米報告

今年の二月から四月にかけて沖縄県から訪米団が相次いで米国各地を回って沖縄の米軍基地問題の解決を訴えた。すでに報告した沖縄女性代表団に続き、学者代表団、沖縄芸能と講演によるピースメツセンジャー派遣、そして、大田知事の訪米団である。

私も、その間隙をぬって三月二十七日から四月五日までサンフランシスコ・ベイエリア、デンバー、ニューヨークの三都市を回り、平和グループの集会や予め面会を申し入れていた平和活動家達を訪ねた。今回の目的は、基地跡地利用の際に問題になる基地内汚染の対処法の糸口をつかむこと、沖縄の劣化ウラン問題について米国の平和運動グループと話し合うこと、沖縄の米軍基地問題を知らせること、そして、親しく

知り合えた人達と電子メールなどによる連絡を続けていくことであった。サンフランシスコ・ベイエリアでは、五月に沖縄で国際女性ネットワーク集会を準備していたサンフランシスコ湾岸地域オキナワ・ネットワークのマーゴとマーサ・マツオカ等が準備したカリフォルニア州立大学バークレー校での「世界軍縮を求める学習会」に参加した。午前中フィリピン、パナマ、韓国、プエルトリコ、メキシコの報告に交じって沖縄の状況を報告した。午後のワークショップは、汚染問題、軍隊と女性、基地跡地利用、労働問題にわかれて具体的な情報交換とこれからの取り組みの話し合いだった。私は、基地内汚染の問題のワークショップに参加した。

まず、どのようにすれば基地内汚染の問題を入手できるかを、フィリピン、パナマグループから報告してもらった。フィリピンでは、現地のフィリピン非核連合などの運動グループを支える米国内の支援ネットワークが結成されており、米国の情報公開法による資料入手や連邦議員へのロビー活動などを取り組んでいるという。パナマでは、パナマ政府が米国に対して情報公開を求めている項目を、米国の支援グループが同様に情報公開を求めるようにしているという。そして、パナマ運河の汚染問題に理

解をしめしてくれる連邦議員を通して情報公開を働きかけるのだ。米政府は、膨大な量の資料を一気に公開して情報の海にパナマ政府を溺れさせようとすることもあるとのこと。情報公開資料を読み込む体制が必要とのことだ。今後、電子メールによるネットワークを作ることを確認してワークショップを終えた。各ワークショップの報告でも電子メールによるネットワーク体制の必要性が強調されていた。

特に、サンフランシスコでレニー・シゲルと会えたことは良かった。レニーは、米軍基地の基地内汚染や有害廃棄物、演習場の不発弾などについてのプロであり、自治体や市民運動へ助言し、米軍や米政府の現状や政策に明るいキーパーソンである。キャリヤー・プロという米軍基地汚染を扱うフォーラムをピースネットで運営している。二時間程度の話し合いができた。沖縄に帰ってから彼から届いた電子メールによれば、国防総省の基地内環境汚染担当の環境担当補佐官と沖縄の汚染問題を話しあったとのこと、大田知事が会えたら良いとのアドバイスであった。さっそく、訪米中の知事に伝えたいが、日程の都合がつかなかったようだ。

サンフランシスコの隣のオークランド市の連邦政府ビルにある前下院軍事委員長

デラムス議員事務所を訪ねた。沖縄の基地問題を説明し、特に海兵隊撤退の要請をおこなった。その後、デラムス事務所から沖縄の米軍基地問題解決を取り組むというメッセージと具体的アドバイスが五月に沖縄に来たメンバーを介して届いた。オークランド市では、アラメダ海軍飛行場の跡地利用に取り組む跡地利用委員会のスタッフと話した。

## デンバー、ニューヨーク

次に訪ねたデンバーは、四年前に私が主催した十四名のオキナワ・ピース・ツアーでも訪ねたところで、前回集会をしたデンバー大学の会議場で講演をすることになった。講演といっても二十名程度の参加者だ。前回お世話になった皆さんが数名参加してくれた。百キロ以上はなれたコロラド・スプリングスからも参加してくれた。

主に、米軍基地の土地の問題を話したが、主に中国を研究している国際関係論の大学教授が橋本首相は沖縄の基地を維持する理由として中国の脅威を挙げているのかと質問したことが印象的だった。私は、日本政府はともかく中国の脅威などい出せない、なぜなら、それは沖縄の基地の永久使用を意味することになり、沖縄県民は大変

反発するだろう、と答えた。しかし、沖縄問題を米国から見ると中国が主要な理由の一つとなっているのだ。

次に、ニューヨークでは、湾岸戦争における米国の戦争犯罪を追及している元司法長官ラムゼー・クラーク氏と同氏が設立した国際行動委員会(IAC)の劣化ウラン教育プロジェクトを訪ね、湾岸戦争で初めて実戦で使われた劣化ウラン弾問題について話しあった。「不名誉な金属」というタイトルで多くの研究者の協力を得て劣化ウラン弾の犯罪性を訴える一般書の出版を五月に準備中であった。沖縄の島島での劣化ウラン弾実射も海外の事例として取り上げられていた。ニューヨークのIACと沖縄で今後連絡を取り合うことを約束した。五月六日に出版に向けてワシントンDCで国際記者会見が開かれたが、連絡を取り合って沖縄からはメッセージを送った。

次号以降で、島島の劣化ウラン問題のその後を報告するときにラムゼー元司法長官やIACスタッフと話したこと、「不名誉な金属」の内容について報告したい。

(本のタイトルは、Metal of Dishonor: Depleted Uranium, How the Pentagon Radiates Soldiers and Civilians with DU Weapons. ISBN: 0-9656916-0-8 : \$12.95)

# 米海兵隊は日本にいない!

## ニューヨーク・タイムズ意見広告 いよいよ掲載へ!

掲載は5月末か6月初め。このニュースが届く頃には掲載されているかもしれません。以下は広告文の全文です。

カンパ第3次集約報告

578万5478円 (5月20日現在)

●皆様のご協力ありがとうございました。  
・みなさんのおかげで、掲載のめどがようやくついできました。  
(賛同金の受け付けは5月いっぱいまでで、その後会計報告いたします。  
「米紙意見広告を実現する会」事務局  
TEL/FAX 0977-85-5003

### 憂慮する日本人からアメリカの友人へのメッセージ

## 私たちの土地から海兵隊を撤退させてください

巨大な在日米軍、特に沖縄の海兵隊の継続的な駐留によって日米の信頼関係が深刻に損なわれかねないことを、私たちは憂慮しています。沖縄の人々、日本中の米軍基地の近くに住む人々は、平和的に尊厳を持って生きる権利をすつと奪われてきました。

「沖縄の人々が反対してきた50年に渡る駐留」  
日本の米軍基地の大半が集中している沖縄は、珊瑚礁と熱帯の海に囲まれた美しい島です。しかしながら、第2次大戦後、「銃剣とブルドーザー」を使ったアメリカ駐留軍によって、地元民は広大な自分の土地を取り上げられました。今日、沖縄の島の二〇数%が米軍基地によって占められ、そのいくらかは土地の所有者の意に反して強制的に借用地とされたものです。五月一日、三〇〇〇人の地主の強制借用された土地の使用期限が切れました。しかし、日本の政府は使用期限を終えるのではなく、土地を継続借用できるように法律を変えてしまいました。沖縄タイムスと朝日新聞が四月に実施した世論調査では六一%の沖縄県民がこれに反対であることが明らかになりました。また、八〇%の沖縄県民が、沖縄からの海兵隊の全面撤退を求めて交渉する知事の努力を支持していることが明らかになりました。私たち日本中の市民は彼らの意見を支持し、日本から海兵隊が全面撤退することを求めます。

「女性や子供たちに対する性暴力」  
五〇年間以上に渡って、女性や子供たちは暴力の恐怖の下で暮らしてきました。一九九五年九月、人の米兵によって引き起こされた少女暴行事件は、反基地運動の勢いに火をつけました。しかし、不幸にも、これは五〇年間の占領の間に起きた初めての事件というだけでは全くないのです。最もひどかったのは一九五五年九月三日、六歳の少女、由美子ちゃんに対する強姦殺人事件でした。彼女を強姦し、殺害した米軍人によって彼女の死体は海へと捨てられました。一九四九年の九月には九カ月の女の赤ちゃんがアメリカ軍兵士によって強姦されました。過去二五年間を通して、四七〇〇件の犯罪が米兵によって起こされると警察は発表しています。そのうち一一〇件は強姦事件です。これらの犯罪の九割が海兵隊によって引き起こされています。強姦事件担当のある精神科医によると、こういった強姦事件の数字は実際よりもかなり低い数字であり、二〇人か三〇人に一人しか訴え出ることはないと報告しています。沖縄はアメリカが外国に大規模に海兵隊を展開している唯一

の場所です。彼らの多くは一〇代、あるいは二〇代であり、彼らにとって初めての外国生活なのです。この変化には多くの困難がともない、それはその高い犯罪統計の中に現れています。「静かな生活を返して」沖縄は文字どおり、基地だらけであり、多くの場合、一般市民の家から単なるフェンス一枚で隔てられています。ある基地では、近くの町が測定をし、軍用機からの騒音が毎日七〇デシベル以上が平均一六一回発生していると言っていることがわかりました。これは沖縄の学校での教育に有害な影響を与えてきています。環境保健部が発表したところによると、これらの学校の子供たちは難聴、大声、情緒不安定、睡眠障害、風邪をひきやすいなどの症例が高い発生率で起きています。「環境破壊」沖縄での米海兵隊による実弾砲撃演習は山の緑を枯れさせ、赤土の流出を招き、川や海を濁らせています。珊瑚礁のリーフはこの汚染によって死につつあります。最近、明らかに変わったことでは、米軍は劣化ウラン弾を沖縄の島島で使用し、そして日本政府に対してアメリカ政府がこれを報告するのに、丸一年かかりました。この劣化ウラン弾は湾岸戦争で使用されたものと同種のものであり、湾岸戦争症候群の原因と疑われており、イラクの子供たちの間では、高い発生率のガンの発症が確認されています。

「私たちは何を共に出来るでしょう。そしてあなたがたは何が出来ますか」あなたがたはきっと、なぜ私たちがこのアピールを私たちが政府にではなくアメリカの人々に対して訴えるのかと疑問に思うかもしれません。私たちは、自国の政府の方針についても、活動を行ってきています。でも、この働きかけは太平洋の両側に対して必要なのです。これは日本の問題であると共にアメリカの問題でもあるのです。

1、クリントン政権の国防戦力見直し(QDR)が現在進行中です。議員に手紙を書いて、海兵隊の撤退を含む在日米軍の撤退を支持するように求めてください。2、あなたの意見や考えを手紙、FAXまたは電子メールでお寄せください。

今日、私たちは沖縄の米軍基地の七五%を占めている海兵隊の撤退を求めています。私たちの願いは軍事を使わないで、市民の連帯によって、日米の真の友好関係を築くことです。私たちはあなた方が沖縄と日本からの海兵隊の撤退



◆写真：嬉野京子  
一九九五年四月、歳の少女が米軍車両によってひき殺された。米軍統治の期間中、日本の警察でさえも立ち入ることができず、事実上、被害者に対して補償されることなど全くありませんでした。そしてその問題は今も続いています。一九七二年から一九九五年までに、五二四九七件の交通事故が米軍人によって引き起こされました。これらのケースの多くで、被害者とその家族は正当な補償もされずに来ています。(写真：嬉野京子)

【有事立法】戦争または事変の際に、特に自衛隊の活動を保障し、一方では、国民の権利を制約しようとする包括的な立法。現行憲法のもとでは案はあっても例はない。『大辞泉』

昨年4月の「日米安保共同宣言」で約束された「ガイドライン」(日米防衛協力のための指針)の改訂をこの秋に控えて、まもなく新「ガイドライン」の中間報告が公表されるはずである。すでに昨年この「キヤッチピース」(第⑧号)で指摘したように、今回の「ガイドライン」の改定には、それを実効有らしめるための国内法の制定が伴うのが大きな特徴だ。政府は意図的にそう呼ぶのを避けているが、これこそ戦時に適用される非常事態法、戦後一貫して制服組の悲願であった「有事立法」そのものに他ならない。

以下に述べるような事情から、これらの法案の中味の詳細は、「中間報告」はもちろん、成立直前まで明らかにされることはない(予想される中味については、この通信@、@@@号)参照。これらは単なる一連の法律ではない。これら諸法令は半世紀生きながらえた現憲法の(少な

くとも平和主義の)いわば正式な死亡証書になる。

### 有事立法は「事務方」にお任せ

と云うと必ず「いつもの活動家の危機アジリ」と思う人が大部分かもしれない。いや活動家の人ですら「集会ではそんな話が出てないね」と言われる方が多いかもしれない。マスコミなど言っても愚か。事態の重要性と世間の「平静さ」のこの巨大な落差の理由は何か。

「有事法」の作成に当たるある防衛庁幹部の発言を聞いてみよう。「平時に政治家に有事法制なんて議論して欲しくない。かえってぐちゃぐちゃになる。平時は事務方で問題点を整理して必要な法案を準備しておき、有事が迫ったらさっさと国会に出して通せばいい。」(日経九七年二月二六日)。政治家にとっては全然頭を使わなくていいのだから願ったり

ことだ。

これが日本、そして日本を動かしている政治家の実態なのだ。細かい？利権がらみの問題には介入するが、国家的重大事になればなるほど引いてしまうという超無責任。彼らには真の合理的意志決定はできない。冷戦終結後、日本への武力侵攻の可能性がなくなった今、なぜ「有事」立法なのか。常識的には「危機」はない。にもかかわらずその法案は防衛庁の金庫から足を覗かせている。膏肓に入った我が国政治家の対米追従と思考停止が民主主義の危機を生み出している。

### 「有事」でないのに有事立法

七八年に制定された現行の「ガイドライン」は、核戦略がらみのアメリカの対ソ新戦略に対応して、自衛隊を共同で戦えるパートナーとしてしようというものだった。しかし先に手を付けられたのは日米共同演習の開始などの軍事的な既成事実作りで、対応する国内法については、「ガイドライン」に前提条件で、「両国政府の立法、予算ないし行政上の措置を義務づけるものではない。」と但し書きもあり、米軍関係の緊急法は制定され

## 今秋のガイドライン改定で「戦時法」の制定が始まる

「ガイドライン」と有事立法

青木雅彦 ● 反戦ドタバタ会議

叶ったり(議決の際に起立する手間だけ)。しかし立法機関が論議しなくないということとは、一般国民は文字どおり蚊帳の外に置かれるはずだ。六五年に国会で自衛隊の「三矢(みつや)作戦計画」

(クーデターの)に八〇件の有事立法を国会に制定させる)が暴露されたときも、当時の佐藤首相の狼狽ぶりから、首相ですら計画を知らなかったことは明らかだった(後に「事務方」に説得されて開き直ったが)。

### 「K半島事態対処計画」の「クーデター」未遂

この政治家の「事務方」(制服組と防衛庁官僚)依存は今も同じだ。最近の例もあげておこう。九四年六月頃北朝鮮の核開発疑惑で、米軍が武力行使オプションを真剣に検討していたとき、日本でも制服組の幹部を中心に米軍を「支える」ための「有事緊急立法」(コード名「K半島事態対処計画」)を準備した。今回は首相などにはその概要は報告されたが、当時の羽田首相の「指示」は何と、「対応を検討してほしいと事務方に言った。我々(政治家)は近づかないようにしていた」(朝日九六年十二月二十四日)。白らは思考停止を宣言し、憲法が完全に停止してしまいう決定を完全に黙認してしまっている。羽田氏や官房副長官の考えでは、これらは時限立法にする考えだったというが、それだけ超憲法的措置だったという

なかった。防衛白書では、「我が国有事に際して必要な法制として」、(1)自衛隊の行動に関わるもの、(2)米軍の行動に関わるもの、(3)「国民の生命、財産などの保護に関わる」ものの3種類に分類している。(1)は八〇年代の前半に防衛庁から中間報告が二度出されている。(3)は実は治安立法で、究極の戦時法だから最後の最後まで明らかにしない。今回の「ガイドライン」改訂と連動するのは(2)の法制である。今秋の新「ガイドライン」には、国内法の制定は義務でない云々の文言はもちろん削除される。逆に米軍の行動を支援するため、国民の人権を制約する法律の制定が「義務」とされるのである。もはや単なる「口約束」だけでは米軍は納得しないからである。先の防衛庁高官は「有事になったらさっさと提出」と言っているが、今回の場合は「有事」ですらなく、ひたすら米軍の便宜を第一に考えあらかじめ戦時立法を作ろうとしているところが新しい。

## 「予行演習」は 大成功—成立の シナリオ

「三矢作戦計画」(策定六三年)では、朝鮮有事を利用して二週間で九〇近い緊急法令を成立させる計画だった。こんな時間で審議なんてできるわけではない。もちろん社共(当時)の議員は何らかの方法で物理的に拘束されているか、あるいは国会を戦車が包囲している状況が暗黙の前提だ。この「三矢作戦」が今年の四月に見事に実施されたのにお気づきの方はどれだけおられたらう。

軍隊の自由を保障する法案を、事前には内容を秘匿、実質審議なしで翼賛的に成立させる。今回の沖繩特措法は完全に有事立法の精神に合致している。法案提出から成立まで二週間というのは「三矢作戦」と完全に符合するが、今回は戦車も議員の拘束の手間も必要でなく、傍聴人を不当逮捕する位で事が成就した。「演習」は予想以上の大成功だ。「本番」の「ガイドライン」に伴う有事立法の提出は秋以降だから、来年度予算を審議する通常国会審議ということになる。いや正確には実質審議なしだ。まず「難民救済の人的な立法」云々のダミーの法案

が提出され時間を稼ぐ、その過程で突如「この行動をスムーズに行うため」とかいう名目で労働者を徴用する法案が提出され、セットでいきなり成立。あとは勢いで、翼賛議員の訳の分からぬバンザイと共に緊急立法が次々と成立。ざっとこういうことが、現在公表されている資料と議員の生熊から予測されるシナリオだ。前記分類(2)が中心だが、成り行きによつては(1)だけでなく国民の人權を奪う(3)のカテゴリーの法案も成立してしまうかもしれない(いったんタブーが破られるとあとは容易だ)。これらはすべてにすべて法案の形で防衛庁の金庫に納められている。ただ首相も防衛庁長官も、詳しいブリーフィングは受けてない。「すべて事務方に一任」だから。野党(もしいるとすれば)は言うに及ばない。国民は事態の何たるかも理解できないはずだ。特措法で明らかになったのは、すでに議会で「改憲勢力」が3分の2を制したことだ。しかしこれら有事法が成立すれば、必ずしも改憲は必要でない。すでにこの時点で憲法は死んでいるのだから。

## 提出されたら 即成立

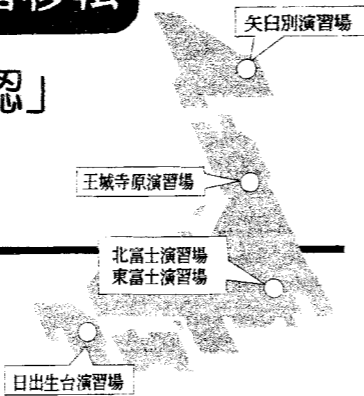
法案が提出されたら、大きな反対のうねりを作り出して国会を包囲して…なんて考えていると当てが外れる。「三矢作戦」や九四年事件(前述)を見ればそんな暇が与えられないのは明らかだ。法案提出前の「先制攻撃」だけが、有事立法に反対する人たちの活路を見いだす方法だ。冷戦終結後「有事立法」は無論時代錯誤だ。オープンな議論で反対派が論破されることは、本来なら考えにくい。

「軍隊に自由を与え、国民から権利を奪う」という「大辞泉」の「有事立法」の定義は明解で本質を突いている。これに「米軍の」と、「国民の知らないところで準備される」という言葉をつけ加えれば完璧な定義になっただろう。いずれにしても「米軍に協力」という一時だけで、半世紀の間守られてきた平和主義と人権条項を本当に葬り去る値打ちがあるのか。安保とは日本人にとって何なのか。戦後最大の選択として、国民的な議論が起これなければ、幾世代にもわたる悔恨の種を残すことになるだろう。

## 実弾射撃演習移転

市民は「容認」  
なんか  
してない。

各地から  
の声



王城寺原での反対運動が、予想外に持続し、時がたつほど力強さを増していったのは、「二人一人の目覚め」があららこちらで確かに起こっているからだと思う。

地元議会もその空気を感じたのか、四月二十日の「移転通告」後も、「反対運動の旗だけは降ろさない」とし、「地方自治の原点までも踏み出した」と、国に抗議文を突きつけた。

「地元政治家は何をやってるんだ」。そういう町民の目があちこちに光ってきたのは、町の将来にとって、間違いなくプラスになるはずだ。

今回私たちは、間近で国家権力の強引さを見た。そしてこれから、時間の問題で演習移転が強行される。その時身を持って感じるようになるだろう。「安保があるから」と一言で片づけられてきた「安保」とは一体何なのか。

王城寺原で運動が始まった頃、「安保」は禁句だった。でも今、少し空気が変わりつつある。「私たちの生活にとって、安全保障とは何か」。そういう問いの入り口は、すぐそこだ。

「やっぱり何をやってもだめなんだ」。気になったのは、学校のがんじがらめの体制の中で、あきらめることを覚えてしまった中学生の中から、そういう言葉が出てきたことだ。

## 北富士

この文章は私、石原剛(いしはらつよし)が個人の責任で書くもので、不正確、不適切な表現があった場合は、私の不勉強の結果です。

(1)天野山梨県知事の移転受け入れ表明  
九七年五月二日、山梨県にある北富士演習場に沖繩で米軍が行っている155ミリ

「国のやることだから仕方がない」。「国のやること」には全く期待を持ってない。農村地帯には、今あきらめが蔓延している。そんな中で、王城寺原の住民は、沖繩の女性の話を聞くことで、目を開かれていった。まず事実を知ることが、いかに大切か、自分の体で分かった人々が、地道に周りの人々に伝え始めた。

りゅう弾砲の実弾砲撃演習を移設すること  
を天野建(あまのけん)山梨県知事は容認す  
る発言をしました。これにたいしては「演習  
場の段階的縮小、全面返還、日米合同演習場  
化しない」を「県是」とし、「山梨県はこれ  
まで十分な負担をしており、これ以上の負  
担をすることはできない」としたこれまで  
の態度を180度ひるがえしたもので県民  
の批判の声が上がっています。

「北富士演習場への実弾砲撃演習移設に反  
対する山梨の会」―「山梨の会」はじめとす  
る県民は今度の知事の行為を糾弾するとと  
もに、「日米共同演習場化を許さない」「全面  
解消と平和利用の実現」をスローガンにし  
て、移設阻止にむけ、運動のあらたな展開に  
取り掛かっています。ここでこの間の運動  
を振り返ってみます。

(2) 九六年七―一集會から「山梨の会」  
結成にいたるまで

沖縄の少女暴行事件発生以後の沖縄の島  
ぐるみ闘争に連帯して、「沖縄でも、日本の  
どこにでも基地はいらない」の運動が山梨  
でも始まりました。「平和と革新をめざす山  
梨懇話会」―「山梨革新懇」は賛同者108  
1人のカンパによって「北富士に米軍来る  
な」ポスターを作成。これは平和行進の通し  
行進者や反核平和国際医師の会に参加した  
メンバーによって全国、全世界に広められ  
ました。山梨中央市民生協は署名一万人を

集め、知事に受け入れ拒否をするように要  
請。新日本婦人の会も女性1000人の賛  
同者を募った意見広告活動を行いました。  
こうした運動を受けて「米軍は北富士に來  
るな山梨県連絡会」―「連絡会」が三三団体  
で結成され、七―一集會が開催されました。  
この集會には、小雨の降る中、演習場梨ヶ原  
哨舎前広場に600人の参加者が集まり、  
地元マスコミも大きく紹介しました。

その後、さらに「米軍演習の移設反対」の  
一点で幅広い共同をひろげる努力が行われ、  
山岳写真家白旗史朗氏などが呼びかけ人と  
なり、「山梨の会」結成が準備されました。  
会の趣旨に賛同する団体と個人は四七四に  
のぼり、保守系の首長や官製の各種団体長  
などを含め本場に広い共同の輪が作られま  
した。そして、本年三月二十九日には保守の人  
もふくめ五〇〇人の参加でシンポジウム  
を成功させました。この日のパネラーには  
山梨県の基地問題の担当者である岡田宣彦  
県民局長や山梨学院大学教授の椎名慎太郎  
氏、白旗史朗氏、日本共産党衆議院議員の中  
路雅弘氏、詩人のわたなべ政之助氏など多  
彩な顔ぶれが登壇しました。岡田氏は受け  
入れに反対する県民世論を配慮しつつも容  
認にも含みを持たせる微妙な言い回しをま  
したが、会場からはオウムと闘った竹内精  
一氏が「最後まで県是を貫き通してもらい  
たい」と厳しく注文をつけました。

## 東富士

沖縄米海兵隊による実弾砲撃演習の本土  
への分散移転問題は、橋本首相の訪米への  
「手みやげ作り」のため、訪米期日に間に合  
わせるべく強引な地元への説得が推し進め  
られ、一般市民の反対意見に耳を貸す態度  
さえ示しえない程のあわたたしい性急さで  
行われ、地元自治体の「容認」発言をとりつ  
けた。

政府は、移転候補の五演習場に関連する  
自治体の「容認」発言を流布させることによ  
り、自治体全体が実弾砲撃演習の移転の受  
け入れをしたかの如く、この問題が解決し  
たと期成事実化しようとしているが、それ  
は私たち一般市民の感覚とはほど遠い理解  
と言わなければならない。

安保条約を全ての思考の上位概念に据え  
置き、「安保と言えは泣く子も黙る」という  
発想では、この問題の解決は到底はかれな  
いことが明らかになってきた。かつて「天  
皇」の名の下に推し進められた軍国主義へ  
の傾斜と、「安保」という名の下の日米軍事  
同盟化への傾斜は、オドロクほどよく似て  
いることに愕然とする。

私たちの市民運動は、今回の実弾砲撃演  
習の移転問題から始まったが、沖縄の基地  
が抱える問題や本土の基地問題までも包含

した根本的問題は、安保条約の抱える問題  
を解決しないかぎりこの問題の解決は見え  
てこないことが明白になった。

「安保条約は真に日本国民の一人一人に  
とって必要なものなのか？」が問われる時  
代が到来している。

政府やマスコミ報道を鵜呑みにしないで、  
自らの生活に視点を定め、自らが、自らのた  
めに、自らの行動を始めなければ何も変化  
は起こらない。

民主主義の最も基本的概念「Government  
of the people, by the people, for the people」を  
問い直してませんか。

(門屋信行/静岡県裾野市在住)

## 日出生台

「いかんともしがたい」という容認から  
1ヶ月がたとうとしている。4月22日、久  
間防衛庁長官が大分を訪れた日、地元住民  
は県庁前に集まった。激しい雨の中、私達  
は反対の声をあげ続けていた。でも、自分達  
の町にとってこんなに重要なことなのに、  
カーテンを閉められた密室で決められてい  
た。すぐ目の前でも遠い遠いところと思え  
た。こんなことであるのかしら、こうやっ  
て沖縄の未来の事も、私達の町のことも決  
められいくんだという事実にあきれること  
にも怒りを感じた。「容認」ということは、

こうした動きに対して政府/受け入れ容  
認派は猛烈な巻き返しを行い、日米首脳会  
談の前に決着を付けるために常軌を逸した  
なりふりかまわぬ工作を地元自治体や関係  
者にかけてきました。たとえば、忍野村村議  
会では五月十八日に開かれた全員協議会  
では五月十八日に開かれた全員協議会  
は移転受け入れ容認の意見は全くでず、次  
回の開催の日程も明らかにされないまま散  
会したというのに、翌日の午後五時には開  
会三十分前に各議員に電話で招集がかけら  
れて全員協議会が開かれ、「移転容認」の意  
見集約が行われました。このような強引な  
やりかたで「容認」が押しつけられてしま  
した。

(3) これからは来年の使用協定期限をみ  
すえて県民世論を高める活動が大切。

今回の知事の受け入れ表明は先に書いた  
ように全く道理がありません。忍野村議  
会で七名の議員が全員協議会への出席を拒ん  
だように、県民世論は米軍の砲撃演習移設  
を容認していません。「連絡会」が憲法記念  
日に開催した緊急集會では一〇〇名が参加  
し一致点での共同を作りつつ県民世論の高  
揚で来年の使用協定期限を節目にした今後  
の闘いの方向性が確認されました。私たち  
は多くの人々との共同の力で移設をくい  
とめるために全力でがんばる決意です。

(石原剛/甲府市議会議員)

政治の中のことで、そこで暮らしている私  
達の反対の思いは変わっていない。「沖縄の  
痛みを分かち合うべきだ」という政府。その  
痛みを一番わかっているのは誰なんだろ  
うと思う。沖縄でいやなもの日出生台で  
もいやだ。みんながいやなものをなくして  
いくということが始まりだと思ふ。今の国  
の姿勢をみて、疑問に思っています。

私は、この動きの中で、どうして自分の地域  
のことを一生懸命考えること、次の世代の  
子ども達、そして自分達の暮らしを守ろう  
ということが「地域エゴ」と言われるのだ  
ろうかと思ふ。ごく当たり前に、この町で  
「安心して暮らしたい」というささやかな思  
いも、国益の名の下に消されるのだろうか。  
沖縄でも他の移転先でも、そこに住む人た  
ちの未来が国のスケジュール通りに決めら  
れていっている。住民の私達はいつも置き  
去り。でも、これからも自分の町で暮らし  
ていく私達は、「国が決めたこと」では終わ  
らない。ここからが始まりだ。私はこの運  
動で出会った人達と一緒に声をあげ続けて  
いきたいと思っている。自分の町から見え  
てきた日本の問題に。

どこの地域もが、真剣に考えていけば必ず  
変わっていくのではと信じている。(桑野和  
泉/子ども達が安心して暮らせる町を願う  
女性の会)

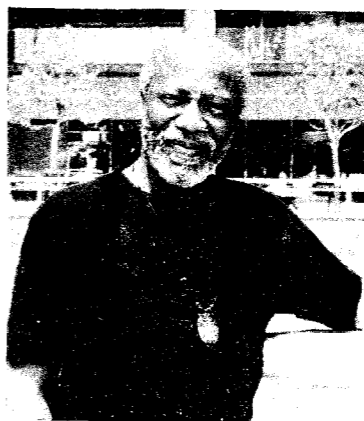
# 貧しさが兵士を作り、戦争を生み出す

報告●山中悦子（編集部）

## 元海兵隊員 アレン・ネルソン さんの訴え

5月6日 新横浜/スペース・オルタにて  
「戦争の文化と平和の文化」から

アレン・ネルソン（19947年アメリカブルックリン生まれ）  
徹底非暴力で知られるクエーカー教団の平和委員会・「青年と脱軍国主義」のコーディネーター。「沖縄駐留米軍を連れ戻すネットワーク」の中心的活動家。今回全国各地の市民団体がネルソン氏を呼んで約20回の講演を開いた。



あなたは今何者ですか？「ベトナム戦争」を知っていますか？あの戦争があったのは今から三十年以上も前のことです。もう「歴史上の出来事」になったといえるかもしれません。読者の中にも生まれていなかったという方も大勢いるでしょう。あの頃のことをはっきり覚えているあなたにとって「ベトナム戦争」と

はどういうものでしたか？あの戦争が自分の生き方に多少なりとも影響を及ぼしたと考えている日本人は決して少なくないでしょう。あの戦争は全世界の人々が、自らの生命に危険を感じることなく茶の間で家族とくつろぎながらテレビで見ている戦争でした。画面に映る映像はつくられたものではなく本当にそこで起

のが常だったから私は絶対遅れなかった。

一九六五年十二月、私は十八才で海兵隊に入った。まず三食食べられるだろう、医療保険にも入れるだろうと思っただ。旅行が出来るだろうというのも魅力だった。叔父たちも第二次世界大戦に参戦したときのことを楽しかったと言っていたし海兵隊が自分の居場所だと思っただ。戦争に行けば敵を殺し自分も殺されることがある…などということには思いが及ばなかった。入った時は知らなかったのだが、間もなく海兵隊は最もハードなところだということがわかった。訓練に耐えかねて脱落する者が相次いだが私はしっかり新人トレーニングを卒業した。このことは学校も満足に行けなかった私にとって大きな誇りとなった。

兵士として最初に学ぶことは口をきかない、つまり質問をしないということだった。考えるのは司令官で兵士は言われたことだけを正確にやるのが求められた。ベトナム戦争に向けて私は三種類の人の殺し方を習得した。人間だったから耐えられないようなことにも徐々に平気でいられるような訓練を受けた。四八時間眠らせてもらえず朦朧とした中で全

てが平気になっていった。身体中の全ての毛を剃られても平気だった。訓練は一週間続き人間としての感覚は見事に失われていった。

ベトナム派遣命令がおりた時、私はぜったいがんばってやろうと思った。戦争映画のつかいこい場面を思い起こしたり第二次世界大戦に参戦した人の手柄話を思い出したりした。海外へ行けるのも嬉しかった。こうでもしなければ外国へ行くことなど一生ない身だったから。ベトナムへ行く途中日本に立ち寄った。沖縄では丘や山々を駆けめぐった。夜は町で飲み兵士仲間や町の人を殴ったりけつたりした。「今日もさんさんあばれてやった」という思いだった。私たちが沖繩に行った時、私たちが沖繩の人たちに招かれていたのではないということ、彼らに礼節をもって接しなさいということなどは政府が教えてくれなかった。

戦争はそれまで想像していたものと全く違っていた

音楽と共に登場するスクリーンの上の

こつていたにもかかわらず、今日の前で殺されていく人々を助けることは誰にも出来ませんでした。時は流れました。あの時あのベトナムで、従軍兵士として何人ものベトナム人を殺傷した元アメリカ兵が来日して多くの日本の市民の前で「戦争の本当の姿」を語ってくれました。以下は、五月六日横浜の集会でのお話の要約です。文責は山中悦子。

私はニューヨーク近郊の最も貧しい地域で生まれました

ゴキブリやネズミと共に成長する中で私が最初に習ったことは家の中でも外でも「暴力」だった。母からはよく殴られた。そして姉妹を守るため、あるいはボールや帽子などの小さいものを守るために外では人を殴った。一足の靴は姉と兼用だった。二日姉が履き二日自分が履き他の姉が二日履いた。クラスメイトに女の子の靴を履いているとからかわれて学校が嫌いになった。一日に二回の食事がとればラッキーだった。夕食の時間に少しでも遅れると食べ物はない

スター俳優は決して死ななかったが、意気揚々と語る戦争体験以外に、生き残ったものが決して話せないことがあることを私はすぐに知った。人間的感情をなくす訓練を経たが私も初めて人を殺した時は吐き気をもよおした。しかしすぐに平気になった。戦争の犠牲者は女、子どもだった。子どもは戦争が理解できないからお腹がすいてくれれば隠れていることが出来なくて出てくる。女性はそうした子どもを救おうとして、たとえその子が我が子でなくとも自分の命の危険を顧みず飛び出してきて殺される。兵士は自分が殺されるかもしれないという恐怖のなかで少しでも動くものをみついたら発砲するのだ。そうして水牛もたくさん殺した。爆弾の音、人々の泣き叫ぶ声が今も「戦争の音」として耳に残っている。

女性や子どもの犠牲者には自分の姉妹、母の姿が投影された。老人も被害者だった。老人たちはいつも村人たちに先に逃した。映画では戦いの後は描かれてはいなかったが、本当の戦いのあとには死体を数えるという仕事があった。男の死体だけだったが、頭でも腕でもどこかに飛んでいればそれを探し出して、一体を完全に数えた。政府や軍にとって

## 元海兵隊員は訴える

それは大変重要な意味を持つことだったのだ。ジャングルの中でハエが異常発生しているところとか、胃の中のものが外へ飛び出しそうになる、目から涙が出るような甘酸っぱい濃い匂いのところを探せばそれはみつかった。ベトナムは暑いので死体が腐るのに数時間しかかからなかったのだ。

後日沖繩を訪れ、私は沖繩の歴史、文化、現状を知った。第二次世界大戦時沖繩がどれほど悲惨な状況であったかはベトナム戦争の体験者としてよく理解出来た。壕の中で赤ちゃんを生んだ女性とも話をした。殺伐とした戦争を逃れて生き残った人たちがその後五十年間もアメリカ軍に苦勞しているのは納得いかない。一昨年の十二才の少女のレイプ事件も例外ではないのだ。もう沖繩の人たちがこの苦勞から逃れる時だ。沖繩の軍隊、特に海兵隊はもうアメリカに戻る時期だと思ふ。

沖繩を占領しているのは誰なのか。車で沖繩の市民を轆き殺し、女性をレイプしているのは誰なのか。殺すことを毎日訓練しているのは誰なのか。自分と同じように単純な理由で海兵隊員になっているのは誰なのか。私は日本の兵隊もアメ

本気で入隊を考える子どもたちが生まれていることは確かだ。私が「君は本当に人が殺せる？」と質問して、映画とは違う本当の戦争の話をする子どもたちは入隊を止まる。私は入隊を止まった子どもたちが将来経済的に自立できるように教育システムの樹立と補充をめざして運動している。もう戦争を支えない。税金を戦争準備に使わせない。そのお金を全ての子どもたちが十分な教育を受けるために使わせたいと考えている。

私が自分の体験を青少年に語り始めたのは、人を殺したのは自分だということ自分で認めることが出来た時からだった。戦争が悪い、政府が悪い、上官の命令だからではなく自分でしたことで認めたのだ。他人よりたくさんベトナム人を殺したいわゆる優秀な兵士だったことが告訴されるのなら受け入れる。ベトナム人に許されなくても謝る。平和に反する文化に責任をとって多くの私の役目になったのだ。



リカの兵隊も貧しさからこの仕事に就いたと思っている。アメリカでは経済的な貧しさは同時に教育の貧しさにつながる。そのことが他の選択肢を持つことを不可能にしている。金持ちの子どもは大学へ行きいろいろな職業を選んでいて戦場に出ていく必要はないのだ。日本には食べられないような貧困はないかもしれないが教育や友人関係の貧しさは存在すると思う。その貧しさは思考の貧しさにつながる。私は「貧困」が戦う兵士を供給する源だと考えている。

平和にふさわしい文化を子どもたちに教えていかなければならない

兵士を最初から「敵」とするのではなく彼らに人を殺す訓練をさせないことだ。殺すことを合法化しそのために訓練をさせているのは政策決定者で彼らこそが問題なのだ。「平和」はそれぞれの家庭の中から一人一人の心の中から生まれる。子どもたちに戦わなくていい生活をさせなければならぬ。子どもたちをたいたたりしない。「頭にきた！ぶっ殺し

## 広島で

四月二八日、アレンさんは一時広島着「ひかり」で名古屋からこられた。急ぎ広島市平和文化センターに赴く。副館長に原爆資料館を案内してもらった。アレンさんは衝撃を受けたようだった。その上で、途中で申し入れをした。アメリカでは広島の実態は何一つ教えられていない。特に子どもたちには。アメリカの子供たちは、原爆を落とされても生き延びることができると教えこまれる。彼らは、この広島にきて実際の姿を学ぶべきだ。広島とアメリカの子どもたちが相互に行き来できる交流を企画したい。

昼食をとり、一時すぎ岩国へ向け出発。岩国市役所に着くと、まず記者クラブに行く。テレビも含め、多くのマスコミが取材に応じてくれた。さすがに海兵隊の航空基地を抱えている町だけのことはある。アレンさんの来日の趣旨を説明し、質問を受けた。

とにかく現地を見てもらいながら話を聞こうと言うことで、三時から四時半まで、岩国基地の正面ゲート、埋め立て予定地となる海岸などを訪れた。アレンさんは、過

てやる」と言った言葉も使わない。大人がまず非暴力にならなければならぬのだ。暴力の背景に貧困があることは最初に述べた通りだ。その意味からもアメリカの軍隊の問題は人種差別と無縁ではない。さらには女性差別も問題である。常に相手と平等な人間関係が築けないところに戦いの文化が生まれるのだ。

私は今青少年に軍隊とはどういうところか本当のこと伝える仕事をしている。政府は多くの若者が入隊を望むような軍事教育プログラムを公立学校で進めている。このプログラムを受け入れるか入れないかは学校の判断に委ねられてはいるが軍隊がカッコいいところだと子どもたちが思うような内容になっている。まずは軍隊側に立ったアメリカの歴史が語られる。ちいさな児童たちはユニフォームを着せてもらったり、キャンプやセイルングに連れていってもらったりする。貧しい家庭の子どもたち特に片親の家庭の子どもたちにとってはこうしたことは大変魅力的なのだ。そして少し大きい子には大学にいくための奨学金が出るとか将校になれるといったことを誘いの手段にしている。

いずれにしろこのプログラムの影響で

去に寄ったことがあるかどうかはつきりはしなかったが、岩国基地という名前については、よく知らないようであった。沖繩と同様、ベトナム戦争、湾岸戦争では、多くの戦闘機が戦場に出撃したこと、思いやり予算が付くようになって基地内の厚生施設が充実してからは、兵隊はあまり基地の外に出なくなっていることなどを説明した。住宅、学校、映画館、郵便局、教会、銀行、アパートなど生活に必要なことはすべて基地のなかでできる体制になっている。また、沖繩の基地縮小に絡んで、普天間の空中給油機が岩国に移駐してくること、更にその背景として滑走路を沖合に移設するという名目で、二一五haもの海を埋め立てる計画であることなど、今日的な問題についても説明を加えた。埋め立て完了後の一〇年後には、岩国の敷地は七八〇haとなり、普天間の一・七倍になる。これにより、少なくとも二一世紀初頭における基地の拡張と恒久化は決定的である。沖繩がまがりなりにも基地の縮小に向けて動きはじめたのと比べ、岩国のベクトルは全く逆に向いている。

## 元海兵隊員は訴える

# 原子力艦 入港情報

(92)

1997.3.20~1997.5.22

S=原子力潜水艦(原潜) スタージョン級  
L=原子力潜水艦(原潜) ロサンゼルス級

## 横須賀

- ◇ 03/31 09:59 原潜サンラファエ(L) 出港。
- ◆ 04/05 11:51 原潜トビーカ(L) 入港。
- ◇ 04/15 09:56 原潜トビーカ(L) 出港。
- ◆ 04/18 11:09 原潜ロサンゼルス(L) 入港。
- ◇ 04/20 08:55 原潜ロサンゼルス(L) 出港。
- ◆ 04/20 18:30 原潜ロサンゼルス(L) 入港。
- ◇ 04/28 10:50 原潜ロサンゼルス(L) 出港。
- ◆ 04/28 16:07 原潜ヘレナ(L) 入港。
- ◇ 05/02 16:05 原潜ヘレナ(L) 出港。

横須賀累計(うち原潜):10(10)

佐世保 なし

佐世保累計(うち原潜):5(5)

初任地(沖縄・勝連町) なし

- ◆ 04/20 10:00 原潜ホノルル(L) 入港。
- ◇ 04/22 10:00 原潜ホノルル(L) 出港。
- ◆ 05/03 08:00 原潜ホノルル(L) 入港。
- ◇ 同日 16:00 原潜ホノルル(L) 出港。

初任地累計(うち原潜):3(3)

●1997.1.1から5.22までの各地の原子力艦  
入港数:

横須賀	10(10)
佐世保	5(5)
初任地	3(3)
合計	18(18)



(立川さき/蓮塾)

埋め立て予定地の海岸に立つて、アマ藻を取ってきて、彼に見せた。埋め立てで、この大切な藻場がなくなってしまうことを訴えた。アレンさんは、ホームレスの人々が日本にもかなりいるのに、そういうところには金を使わないで、基地の拡張のために、しかも大切な藻場をつぶしてまで、お金を使うというのはひどすぎる。もつと使道があるはずだと明快に答えた。

夕方からは、広島に戻り、講演会を持った。約70名ほどが参加し、沖縄の実弾演習の移転候補地となっている由布院からも浦田さん、松村さんが来てくれた。アレンさんの講演とギター演奏を聞くことができた。彼は、終始、子どもたちや貧しい人々の生活や生き方との関連で、軍隊や基地の話をして、多くの参加者の共感を得たように思う。兵隊に入っていく人たちは、アメリカ社会のなかで常に差別されている人たちである。個人が悪いのではなく、軍隊という組織が問題なのだ。

ハードスケジュールで、やや疲れ気味と聞いていたが、広島・岩国では、多くの人ととても率直に接していただき心より感謝したい。今後、岩国の海兵隊基地の問題についても、アレンさんと連絡を密にし、ともに運動を作っていくらと思う。

(湯浅一郎/ピースリンク広島・呉・岩国)

## 京都で

四月十七日、米軍用地特別措置法に抗議する国会前座り込み現場でかけつけたアレンさんと初めて出会った。一目で気持ちほぐれ京都での再会を約束した。京都での集会は、在日韓国、朝鮮人の友人たち、フィリピンの仲間、そして沖縄出身者と、日本人は半分以下。集会を知って旅行先からかけつけたという若者も加わった。

アレンさんは、自分の生い立ちから語ってくれた。ブルックリンに生まれて母と姉三人、彼らの貧しい小さな部屋にはネズミやゴキブリがはいまわった。そこから抜け出すために入った軍隊。十三か月のベトナムのジャングルでの体験。戦争とは何かと、アレンさんは私たちに問いかけて、訴えた。米兵たちとはアレンさんと同じように食べもの、住むところ、医療を求めて、自分たちの生まれ育ったスラムを抜け出したいがために軍隊に入った若者たちなのだ。貧しい子どもたちどうしが戦場で殺しあう。

戦争に反対する人たちは兵士を憎むべ

みをうちながらお互いを知り合い、アレンさんの生ギターのブルースに酔った。タガログ語、朝鮮語の歌がそれに続いた。私たちはアジアを蔑視し続ける日本の中で、アジアの友人たちに助けられている。アレンさんとの出会いを通してなにかそれに応えたいとの思いを新たにしました。

(立川さき/蓮塾)

きではない。彼らは貧しい人たちであり、この世界で自分の居場所を求めている人たちである。私はこうした人々を貧しい地域から軍隊においやる政治、戦場においやる政治を憎むのです。と、アレンさんは言った。さらに在日韓国人の若者の質問に答えて、犠牲になった人に許さないとは言えない。私にできるのはあやまることだけ、それしかできないのだと言った。

始めは、自分のしたことを認められず、命令にしたがったただだと自分に言い聞かせた。話し始めたのは自分が本当に「やってしまったんだ」と認めてから。それは人を殺したと言ったことを告白すること、大変な痛みをともなう。多くの兵士たちはその痛みの中で精神を病み、麻薬やアルコール中毒になっていく。私は一八、九歳の友人を戦場でなくした。彼らの死を、いのちを無駄にしたくないから、真実を話し続けようと考えている、と。

そして、戦争の根源には差別意識があ

(5ページ下段から)

登場となる。要論文を手渡し、シユブレヒコールでこの日の行動が締めくくられる。オープニングからここまで十二時間に及ぶ行動に、ヨコスカの人たちの目はすでに凶眼タニシ目サバ目と化している。解散。程近い「一福食堂」(ヨコスカ御用達の偉大なる食堂。安い、旨い、店古い)でノドをうるおす。

向かいに座ったKセーネン(前出のゲート前熱唱オトコ)が言う。僕も彼もプロレス・マニアだ。「フオール負けしそうなになった奴が、試合中に『今からルールをK Oかギブアップのみのデスマッチに変更しろ!』と強要するようなものやね。しかもレフェリーがそれを認めてしまった」と。多少(いや、かなり)不謹慎なたとえかも知れないが、言い得て妙だと思う。

反則魔の極悪レスラーとそれに肩入れする不公平なレフェリーによって、沖縄の人々は、圧倒的に不利な試合展開を余儀無くされている。本土の僕らは、いつまでも観客席から「沖縄ガンバレ!」とエールを送っているばかりではいけない。同じリングに乱入し、対等なタッグ・パートナー同志として、ともに悪役レスラーを撃たねばならないのだと思う。まずは「わが町」で、「沖縄のように頑張ろうとする」ことを通じて。

## 元海兵隊員は訴える

## 会計報告

(97.4.23～5.23)

### [収入]

○前月からの繰越し	466,733
○今月の収入	78,247
会費収入	32,000
(内訳)	
維持団体	0
維持個人	0
参加団体	0
参加個人	0
通信会員	32,000
カンパ収入	10,000
預金利子	0
資料収入	0
運動収入	36,247 軍縮ハガキ収益

### [支出]

●今月の支出	256,600
事務所代 (5.6月分)	80,000
水道光熱費	2,484
電話FAX費	3,607
郵送費	40,210
文具・備品	97,839 パソコン・プリンター
印刷・コピー代 (紙代)	21,420
振り込み手数料	1,125
雑費	9,915

●次月への繰越し 288,380

\*行動費は行動プロジェクト毎の独立採算となっているため、それにあてはまらない収支のみがこの欄に計上されます。

## 月刊キャッチピース

No. 53 (通巻132号)

発行●脱軍備ネットワークキャッチピース  
連絡事務所●〒222 横浜市港北区錦ヶ丘  
10-4 ハイッ幸1-B

☎・FAX 045(433)3483

E-MAIL : tamaki@ab.mbn.or.jp

編集●月刊キャッチピース編集委員会

郵便振替●00160-7-136148キャッチピース

定価●100円 (通信会員年間3000円)

編

集

室

か

ら

●「NYタイムズ意見広告」の紙面作りを、ああいいですよとお引き受けしたのが3月中旬(だったと思う。もはや記憶もぐちゃぐちゃなのだ)。慣れない英語と格闘しつつ時間ばかりが過ぎていく。結局5月初頭掲載の予定が、1ヶ月も遅くなってしまった。最後の場面では、NYT本社が「写真」に難色を示し、あわや、という場面もあったが、まずは版下を手渡すことができた(そのテンマツは別の機会に)。湯布院の皆さんを初め、カンパを寄せて下さった皆さんに遅い仕事をお詫びしたい。(た)

●超急がしの仕事に加え、家庭のちょっとした問題もあって、この1ヶ月は、何カ月分も神経を使った様な気がする。そんなある日曜日。神奈川県民ホールで、小沢征爾指揮・モーツアルトの「魔笛」を聴いた。音楽に「癒し」の力があることを初めて身にしみてしまった。第2幕、ベートーベンがチェロの変奏曲の主題に使った、あの有名な二重唱の場面では、不覚にも涙を流してしまいました。と、いつになくしんみりと決めてみました、です。(た)

●事務所のある菊名駅はSMAPの香取慎吾クンの家のある駅だということは前にどこかで紹介したことがあると思うけれど、もうひとつ芸能ネタ。火曜サスペンスでシリーズになっている、池上さみ子さんが看護婦さんになっているドラマ(今週放送だった)を知ってます?ドラマで彼女が暮らすマンションは我が事務所から徒歩一分のところ。だからどうした?どうもしません。すみません。(や)

## キャッチピースの ホームページ開設

青木雅彦さんの努力で堂々オープンです。最近のニュースの他、資料も多数。リンクも今後充実させていきます。のぞいてみてください!

<http://www.osk.threecwebnet.or.jp/~btree/catch/>です。